明治三十八年十二月一日發行

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

懼るゝこと勿れ、われ萬民に關りたる大なる喜の音を爾曹に告ぐべし。それ今日ダビデの邑に於て、爾曹のために救主生れ給へり、是主たるキリスト也。

第二巻第八號

主基督なる救世者(英文、邦文) 社説
聖書研究(邦文) エー、シー、マクドナルド
吾黨の教育(邦文) 山月子
宗教とは何ぞや(邦文) 外村義郎
米國女學生生活(邦文) 河井道子
主の聖誕を懷ふ しづのや
『牧者』の歌(英文)詩廿三篇
シリア客の物語(英文) ダブリユー、エー、ナイト
クリスマスの光(英文) イー、ジー、アトウツド
期いたりて(英文) エム、イー、サングスター
雜錄

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子

『明治の女子』は日本基督教女子青年會の創立委員が發行する月刊の聖書研究錄なり。
『明治の女子』は一年分十二冊の定價郵税を併せて金五十錢。
發行所は東京市麴町區土手三番町十五番地
日本基督教女子青年會の創立委員は

委員長 ホイットマン孃
幹事 ルキス孃
ワージントン孃
ウエスト孃
津田（梅子）孃
花井夫人
ヘルム夫人
フィシャー夫人
平野孃
小崎夫人
エリス孃
ソーパー孃
フェルプス孃
ハミルトン孃
ザーフルー孃
佐藤（錦子）孃
河井（道子）孃
モリソン孃
萬國基督教女子青年會日本支部幹事 エー、シー、マクドナルド孃
同上

明治三十八年十一月廿八日印刷 （定價 一册四錢 郵税五厘）
明治三十八年十二月一日發行 （一年分（十二册）郵税共五十錢）
東京市麴町區土手三番町十五番地
發行兼編輯人 エー、シー、マクドナルド
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
印刷所 株式會社國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子 第二巻第八號 明治三十八年十二月一日發行

聖書研究

使徒行傳(二)

エー、シー、マクドーナルド

◉概觀。四。

(イ)第一の説敎。二〇十四―卅六。
(ロ)第一の奇跡。三〇一―十。
(ハ)第二の説敎。三〇十二―十六。
(ニ)第一の迫害。四〇三―廿二。
(ホ)第一の蹉躓。五〇一―十一。
(ヘ)第二の迫害。五〇十七。十八。
(ト)勞力の擴大。十一〇一―七。

◦ ◦ ◦ ◦ ◦

五。陣營の進轉

(イ)聖靈によりて力を得たる兵士は、今やエルサレムを去りて、世界を征服する首途に上らんとす。彼等は威儀堂々として、艱險なる一偉業に着手する主の兵卒也。以弗所書六〇十一―十七。彼等は各々その立場を占むるに先ちて、能くその戰略を學び(使徒行傳一〇八)、而して後戰鬪の準備に從ひぬ(使徒行傳一〇十四)。かくて戰鬪は開始せられたり。見よ、この戰鬪は、主の王國に敵するもの共を、悉く敗滅するにあらざれば、決して休止することなかるべし。哥林多後書十〇三―五。哥林多前書十五〇廿五、廿六。

(ロ)**第一の奇跡**、ペテロの説敎の後、信者の數いよ〳〵増し來る。使徒行傳二〇四十二、四十七。五〇十四。是に於てか陣營の進轉は、更に一歩を加へたり。先きにペテロの説敎に感動したる人々は、今や同人等の奇蹟を行ふ力あるを見て、いよ〳〵その感觸の度を高くするに至りぬ。使徒行傳三〇一―十。この世の觀る處よりいへば、ペテロもヨハネも貧しきものなりき。されど彼等は神及びイエス、キリストにある靈力を有てり(使徒行傳三〇六)。この世の戰鬪に於て重要なる武器は財貨也。日露の戰に於て、我邦は一日一百萬圓を要したりといふ。されどイエスの統率し給ふこの戰鬪

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に於ては、神のみ力を以て罪を滅し、人生に向つて平和・歡喜とを齎らすものたるを知るべし。

この跛者に施されたる奇蹟は、ペンテコステの日の焰の舌に於けるが如く、人々を駭かすこと一方ならざりき(使徒行傳三〇十)。神がおのれの力を顯はし給ふ時は、人々の驚駭を招くが常也。我等は神の愛と憐とを知悉せざれど、そのみ下に來る人々に、親しく垂れ給ふ愛憐の深きものあるを見る。羅馬書十一〇卅三。

(ハ)**ペテロが第二の說敎**。奇蹟はペテロに向つて第二の說敎を試むべき機會を與へたり。使徒行傳三〇十一—廿六。ペテロは群衆に對し、さきにもまして强く、彼等が神の子を死に至らしめたることを語れり。使徒行傳三〇十三—十五を再讀すべし。彼等の罪の大なるにも係らず、神はキリストを死より起して、彼によりて跛者を健かにし給ひぬ。使徒行傳三〇十六。ペテロは人人に悔改むべきことを勸め(三〇十九)、かつ不信者に臨む刑罰について語りぬ(三〇廿三)。

(ニ)**反對の起始**。ペテロの說敎は、悔改むることを欲せざる人々の反對を惹起すに至れり。その反對者は、第一、キリストを死にわたす手先となりたる民の有司。使徒行傳四〇一及び馬可傳十四〇五十三、五十五を參照せよ。第二、キリストの復活を信ぜざりしサドカイの徒。馬太傳廿二〇廿三。

かねては互に反目せしこれらの人々、今や相糾合して、ペテロとヨハ子を捕へ、これを獄裡に投じたり。四章四節との連絡に注意すべし。人々はかゝる迫害に逢ひながらも、おのれの罪を認めて、キリストの下に來れり。羅馬書八〇卅八、卅九。キリストがこの世の生活を始め給ひてより以來、試煉、誘惑、迫害の如きは、却つて只その性格を强固ならしむるに過ぎざりき。

翌朝二人を集議所に引き出し、ユダヤ人中の有識者といはるゝものども、相集りて訊問を始む。ペテロ、ヨハ子の如きは、無學の小民なるを以て、かゝる莊大なる公庭に出でなば、必ず戰慄して、敎會はこれがために一大打擊を蒙るならんと思はれたり。四章五—十二を讀みて、その成行を知るべし。彼等がかゝる勇し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

き答辯を爲し得たる原因は、十三節に記さる。これイエスが彼等と偕に在りしを以て也。而して最も鋭敏に彼等の勇氣あることを悟りたるものはその敵人なりき。敵人の認めたる所は、

一、ペテロ、ヨハネの勇氣。

二、癒されたる跛者。

この場合に於て、敵人は恐喝を行ふの外、他に何事をも爲し得ざりき。四〇十三―十八、廿一を讀みて、ペテロの徒をして罪と復活について、また說く所なからしめんと勉めたるを知るべし。二人のものはこれによりて如何にせしや、彼等は懼れたるか。四〇十九、廿を讀むべし。

是に於て、驚くべき一大祈禱の會は開かれたり、使徒等はその友の下に歸れり。四〇廿三。おなじき心の祈禱。四〇廿四―卅。聖靈の充滿及び祈禱の應驗。四〇卅一。廿九節に於ける祈禱を讀むべし『爾の僕等に臆することなく、爾の道を宣ることを得させよ』。次に卅一節を讀むべし『彼等臆することなく、神の道を宣ぶ』。

これが敎會に及ぼせる影響については、四〇卅二―卅七を讀むべし。一、會員の一致。二、敎會の威力。三、會員相互の親情。加拉太書六〇二を見るべし。

(ホ)**第一の蹉躓**。五〇一―十一。罪敎會の外に遁れて、信者皆な神に對して信實なりし間は、敎會は發達を遂げ、集まるものも亦た多かりき。されど罪一たび敎會の內部に侵入するや、神の怒直ちに敎會の上に降れり。僞善はアナニヤ及びサッピラの犯せる罪なりき。彼等の財產は、彼等自身の所有也。これを存續するも、また賣却するも、固より彼等の權内に在り。されど彼等は自ら寛仁の行を爲さずして、只その榮譽を得んことを欲したり。バルナバが贏ち得たる好譽を親しく見て、彼等もまた人々にしか思はれんことを望めど、現に財產を棄つることは、彼等が敢てし得ざる所なるを以て、玆に神を欺かんと試むるに至りぬ、(五〇三―五)。この恐るべき敎訓は、深く玆に論ずるの要なし。神は惡を憎み、義を愛し給ふ、故にこの草創の際に當りて、

敎會なるものは、正しく信實を以てその基礎となすべきことを、明かに示し給ふべき要ありし也。希伯來書一〇八、九。神は外部の樣子を見て人を判せず、內部の生活を察してこれを定む。故にエホバの僕たるものにして、若し神のみ心にかなはんと欲せば、宜しく外部の擧動は勿論、その思想動機に至つても、常に信實ならんことを要す。詩篇五十、一〇六、十。

かくて敎會は潔められ、かつその敎訓を學び得て、事業はまた步一步を進むるに至れり。五〇十二ー十六。

(へ)第二の迫害。使徒等は續いて休徵を行ひ、神のみ力を顯すことを勉む。其結果、敵をして嫉妬の情禁ずる能はずして(五〇十七)再び彼等を獄に投ずるに至らしむ。この度は、神敵の計略に干涉し給ひければ(五〇十九ー廿一)その結果、敵人の中に、多くの悔改者を出だすに至れり。五〇廿一ー廿六。敵も使徒等を獄裡に索めしかど得ず、却つて宮殿に於て、彼等が道を說けるを見たり。五〇廿、廿一、廿九。

祭司等これを見、いたく惑ひて、頻りに良計を按じたり。今は恐喝も彼等を屈服せしむるに足らざれば、最早彼等を殺すの外なきを見る(五〇卅三)。然るにガマリエルとて、當時ユダヤ人中の大學者といはれたるもの、彼等に告げて、深く愼むべしといふ。(五〇卅四ー卅九)。彼の忠告に二つの理由あり。第一、使徒等の說く所にして虛僞ならば、決してその功果を見るべからず。第二、されどその說く所眞實なるに於ては、汝等は神に逆らふものとならんと。彼等はこの忠言を納れて、使徒等を殺しこそせざれ、尙ほこれを鞭ち、再びこれを喝しぬ(五〇四十)。

この迫害に逢ひて、使徒等の勇氣挫けしや。五〇四十一、四十二。羅馬書八〇卅一。

(ト)勢力の擴大。使徒行傳六〇一ー六。事業の發達と共に、一層これを助くるものを多く得て、勢力を分つの要あるに至れり。執事の職は、使徒の職に比して、束縛せられざる觀ありと雖ども、尙ほその人の信實にして、聖靈に滿てるものたるべきことに於ては即ち一也。六〇三、四。第五節にある第一及び第二の人の名は、後

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にしば〳〵現はるゝを以て、特に注意すべし。この勞力分剖の結果如何、六〇七を讀むべし。

ステパノは大説敎者として、奇跡を行ふものとして、直に世に知らるゝに至れり(六〇八)。而して多くの人人彼と爭論す(六〇九)。其結果如何。

一、彼等はステパノの智慧に敵すること能はざりき

二、ステパノの説敎を妨げんとて用ゐられたる方略。

ステパノこの方略を防ぐ。彼は第一に、ユダヤ人の歷史を一貫して、當時に至れる神の導きを概説し、第二に、神の導きに背きたる先祖に傚はんとする聽衆の罪を擧げたり。

この防衞の論は、衆人の怒によりて妨げらる。七〇五十四。

衆人の憤怒はその極點に達せるに、ステパノは悠然天を仰げり。七〇五十五。衆人は惡魔の僕となりて、おのれの罪を認むれども、これを悔改むることを欲せざりき。ステパノは幻に『神の右に立てるイエス』がおのれを待ち給ふを見たり。主は殉敎者を天國に迎ふるために、おのれ先づかしこに昇り給へり。ステパノの如きは、死に至るまで主に忠信なる殉敎者の魁となりぬ。『殉敎者の血は、敎會の種子也』と、宜なるかな。默示錄十二〇十一。

論説

吾黨の女子教育

山月子

女子敎育に對する文部省の敎則は、良妻賢母を養成するに在りといふ。所謂良妻とは何ぞ。賢母とは何ぞ。これらにして若し不正義不完全なる現時の家庭に、都合よき妻と母とを作るに在りと解する者あらば、其不當なるや明らけし。

之が爲めに反駁を試むる者は曰く、女子敎育は、人を作るに在り。若し良妻賢母の敎育といふものあらば、之に對して良夫賢父の敎育といふものなかるべから

ず。是れ寧ろ一笑すべきなりと。然れども男子の生活に於て、國家の人たり、社會の人たることが、大部分を占むるが如く、女子の生活に於ては、其妻たり、母たることが、大部分を占むるものとせば、良妻賢母の修養も亦大に重んぜざるべからざるや疑なし。

然らば吾黨の所謂女子敎育とは何ぞや。曰く、

信仰と、淑德と、學問と、技藝と、健康とを兼ねたる人を養成するに在り。先づ人として善美なる者たらしめんことを期す、是れ第一義なり、其善美なる人が、娘としては如何すべき、妻としては如何すべき、母としては如何すべき、一家の主婦としては如何すべきやを敎ふ、是れ第二義なり、而も第二義なるが故に、第一義よりも輕しといふに非ず、第一義の道は、第二義の道に活用せざるべからざるものなればなり、切言すれば、第一義即第二義、第二義即第一義、體用不二、妙道一貫す、

たゞ『良妻賢母』をいひて、『人』を言はざるは、甚だ完からず

たゞ『人』をいひて、『良妻賢母』に及ばざるも、亦完しといふべからず、

其『良夫賢父云々』につきては、余は女子敎育上より、又社會改良上より、今の多數の日本男子に、かゝる敎養の必要なることを思ふ者なり、

聖パウロが以弗所書五〇廿二―卅三、及び六〇一―四にいへる處、また聖ペテロが、彼得前書三〇一―七にいへる處を味ふべし

基督の道は、人たるべき道を敎ふるのみならず、良妻賢母たるべき道を敎へ、良夫賢父たるべき道を敎へ、良子たるべき道を敎ふ。天道人情、至らざるなく、通ぜざるなく、盡さゞるなく、完からざるなし、善く之を悟りて、身に體し、人に及ぼす、是れ眞傳導者にして、又眞敎育者なり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

講演

宗教とは何ぞや

外村義郎君談

世界には色々の宗教があるが、其中、三大宗教とは佛教、マホメット教、基督教である、抑々宗教とは何ぞやと云ふ六かしい問題を一口で申すと、即ち宗教とは人間と人間以上の者との關係、又は人間と神との關係である。併し關係にも色々ある。知らぬ者同士が、一學校に來て勉强する、之も一つの關係、又知らぬ日本人同士が米國で逢つて、同國人だからといつて交際する、之も一つの關係である。人間と神樣との關係は斯く淺いものではない。神樣は垂簾の奥の扉の中におつて、人間は遙に神樣と離れた處に居ると云ふ關係ではない。即ち人間が神樣と同情同感になつて、神の喜び給ふ事を喜び、神の悲しみ給ふ事を悲しみ、神の怒り給ふ事を怒る樣になり、神、我が心に在し、我神の中にありと云ふやうになるのが、私が玆に云ふ處の關係である。然らば、私共は神と云ふ者をよく詮議せねばならない。神樣が怒りつぽい御方であつたら、私共も怒りつぽくなる、神樣が恐しい神樣なら人間も恐しくなる、神樣が妬の神樣ならば人間も同樣、神樣が善の御方ならば人間も善と成つて來る。併し人間は反對する癖があり、人が善と云へば惡と云ひ、有と云ふと無と答へる。天地に神等あるものか、何を爲るにも自分の力、自分の智力、自分の腕前でする、自分の金でする、神も佛も有るものかと云ふ人がある、然し神無しと云ふ事を證據立てるのは、神有りと證據立てるより六かしい、何故かと云ふと、一日には晝あり夜あり、一年には春夏秋冬の變化あり、種子播けば果を結ぶ。どうして斯んな順序よいものが、秩序あるものが自然に出來得るものであるか、樹木を植えて置いたとて、家屋が自然に建築さるゝものではない。紙を集めて置くと自然に書籍が出來るかといふに、決して出來ない。家屋は大工に依つて建ち、書物は思想す

る人が有つて出來る。第一自分と云ふ者を見れば能く解かる。人は自分に對して尊敬の念、信頼の念がある此念があれば、何か尊敬さるゝもの慕はるゝ者、頼みになる者がなくてはなりません。人間に二つの眼がある、之は事物を見る爲め、しかも見る事物がある證據であります。米國の或洞穴に住んで居る魚には、目がありませんが、それは見る必要物がないからである。耳も音が天地間にあるから、聞く道具として備へられたので、五官について能く考へて見ると、實に都合よく調和して居る。啻に人間は外形ばかりでなく、心も釣合よく出來て居て、頼み度い。慕ひ度いと云ふ念がある限りは、頼みになる者、慕はれる者が存在すべき筈である。

基督敎で敎へる神樣は一である。日本では八百萬の神があると云ひます。私が一度アイヌ小舍を見に行きました時に、丁度アイヌの御祭がありました。川柳の枝を川で洗ひ、一尺程に切り、御幣の樣な物を作り、サ出來上ると、今迄草鞋が懸つて居つた川柳が俄に尊くなり、少しでもそれが手に付くと、其人は死ぬと云つて居るが、此に類したものが澤山に飾つてある家が我等の近所に多くあるまいか。何でも神に成れる樣に考へると、八百萬以上の神樣が出來るかも知れない。又或人は成程神は一つであつて、宇宙即ち神だ、草木金石一切佛だと云ひますが、基督敎の神は斯の如きものでない。然らば如何なる神かと云ふと、聖書に神は靈なりとある。神には形がない。我等の心に形がない樣に、キリスト敎の神は心の如き靈の神で、宇宙の内外に在まさゞる處なしと云ふ神で、天地を創造して、且つ之を支配しつゝあるのである。此神は父なる神にして慈愛に富み、我等と親睦し給ふ神である。我等が自分で此神を知らうと勉める先に、神は御自身の方から我等に近づかうとして居られるのである。赤子の時には、子供は父母を知らうとしないが、親の方から、父母の見分けが付く樣にと骨折つて居るのと少しも違はない。神樣も自分を知らせたい、表はし度いとの思召で、イエス、キリストを世に遣し、神の愛を示され

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たのである。イエスの一生は、神の愛を顯したものである。太陽が如何に赫々と照つて居ても、戸を固く閉ぢたら、日光は中へ這入ることが出來ない。神の愛の光も我等の周圍を照らしてゐても、心の戸を開けぬ限りは、光明を見る事は出來ないのである。

キリスト教の神樣はかゝる神樣で、自由を持ち、樂しき生涯を送り、平安の途を行きたいと思ふ人々に、此神を信仰なさる樣に御勸め申したいのである。

（河井記）

藻鹽草

米國女學生生活（二）

河井道子

初年級

九月の末、即ち新學年の始まる二日前に、何だか淋しい感を抱きながら、カレヂへ遣られたが、學校の園内は、既に歸校した學生や、荷馬車で忙はしげに見えた。寄宿舍は五棟あるが、其中一番西部に位置を占めて、常春藤で石造の壁を全く隱された秀麗なラドナ館が自分の寄宿舍で、其二階の二間四方の一室が自分の部屋でした。東窓から廣々とした芝生や、其周圍の建物を臨み、北窓は幽邃な森と相對して居る。室内には寐臺、簞笥、机、本棚、椅子、顏洗臺が雜然と置てある處へ、先に送つた荷物が縱橫に積重ねてあるので、少し部屋らしく片付けやうとしたが、何から先にして可いやら、茫然して居る處へ、トン〳〵戸を叩く人がある。「御這入」い聲と共に、三四人の學生が入つて來て、名名自身で自身を紹介しながら、「本當に貴女の御入學を喜びます」と親切に挨拶をして、何の寄宿舍の何號室へ遊びに來いとの言葉を殘して去つた。半時間計立つと、又トン〳〵叩く音がして、入つて來るのは四五名の學生、椅子はまだ一脚しか無い、荷物は處狹く迄散亂して居るのに焦心して居ると、先方はそれを察して「何御構ひなさるな何人の室内も今は御同樣」と云つて慰めて呉れる。各々姓名、室號等を告げ、入學祝賀の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

意を表して數分の後に去つた。一時間立たぬ中、又も一群の訪問者が遣て來る、是で迚形付けも出來ない、翌日も尚ほ訪問者が續々來るので、實に閉口した。多分日本人を見たい好奇心に驅られてさうなのかと邪推したが、後に至つて始めて、上級生、格別に第三年生は、初年級を保護し輔佐する責任があるから、新入生を一々訪問して呉れるといふことが分つたのでした。

同館に同級生が廿名居つたので、自分の樣な勝手の分らない者には、互に問合ひ、助合ふ友達があつて、實に仕合せでした。

十月一日愈々開校となると、講堂は四百餘名の學生と、其父兄とで充滿して居る。校長に面會しやうと願ふ者が、事務所前に黒山をなして、三時間も續けて二三日待つ者も小數でない、誰が何學生だか、誰が同級だか一向見分も付かぬ。何の先生が何科の御受持やら勿論知らない、只面白半分に此處其處馳せ暮し、疲れ明すのみで、部屋の飾付なんかは最早失念してしまつた樣子でした。開校の翌日、誰からともなく回文が來て、午後三時何々館何號室に會合せよとある、行つて見ると、廣からぬ部屋に、新入生が大根漬の樣に押付られて、窓となく、寐臺となく、机となく、一面に坐つて居る、一人聲高に曰く、「諸君、是が我組の第一回會議である、先第一に假役員を撰擧しませう」と。直ちに會長一人、書記一人、會計一人多數決にて撰定された。御互に未だ知合ふ暇もないから、一寸眼立つた者を皆指名した丈でした。今度其會長が屹立して、此名譽ある位置を瀆すまじきことを誓つて、扨て云ふ樣「諸姉、本校の習慣として、新入學生は暴進（ラレ）と云つて我級一同が列を成して、各校舍を通行せねばならぬ、それで明晩是を行ふ、二年生は可成我等の進行を妨くるが、三年生は我等を保護する此暴進（ラレ）は我等の顔觸だから、列を亂さず、又組の體面を傷くる事のない樣に御注意ありたい、就ては進行の唱歌を要するから、誰でも耳慣れた節に、適當の文句を添へて、今夕七時半迄に役員に提出なさい、撰定したら直ぐに配布しますから、可成そつと練

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

習して戴きたい。明晩七時に運動場で整列する。再び集會の必要があつたら報知致します云々」と、私は皆が事務處辨に臨んで、實に秩序的なのに感服しました。

翌晩の暴進、勇氣こんで歌ひながら、片端の寄宿舍の下から二階と廊下を通り、一時間半かゝつて終局點へ達し、全校に歡迎されましたが、二年生の障害物として廊下の眞中へ椅子櫃を積み、細引を張散つてあつたので。それを乘越へ、潜り越へるのに、息もつきあえず、髪も亂れ、中々の御苦勞を見ました、呵々。

兩三日後、某會は我級の爲に夜會を催しました、大勢の事でしたから、自由に通行も出來ません。併し一上級生が私を同會の役員等に紹介してやるといつて、親切に人々の間を押分けて、數人の立並んで居る場所に達して、此方は會頭某、其隣は副會頭、次は誰と、順を追うて紹介してくれましたが、其中の一人で、目立つた夜會服を着けた氣高い婦人は、紹介をも待たず、私の手を執り、温和な調子で「河井樣、入學をお祝ひ申します、入學試驗の御成績も拜見して滿足しました。カレヂは中々多忙な場所で御座いませう。最早親しい友達も出來ましたか、增々將來の御進歩を祈ります」と流暢輕妙に述べられたので、自分は驚いて、返す言葉もなく、默然と見詰めて居つたが、終に口を開き、「色々御親切の御言葉難有存じます、失禮で御座いますが、御名前を御知らせ下さい」と云ふと「えゝ河井さん、貴女は私を知りませんの、私は校長トマスで御座います」と、今度は先方で喫驚、傍に押詰めて居つたものが、此會話を聞いて、笑ふ聲が急に息みさうもないので自分は穴へでも這入たかつたが、穴處か、逃る透間もない、其時何と返事をしたか覺えて居ない、御馳走を勸めた人が有つた樣だが、それ處か、只室外に出たい心が一すじで、無理に外へ出て、澄み渡つた秋の月に、火の樣になつて居た顏を冷して、影濃かな並樹の路を獨りで逍遙したが、あゝ今日邊、誰があの邊を歩いて居るか知ら。

主の聖誕を懐ふ

しづのや

われ主の降誕の日に接する毎に、未だ曾てかの十字架の下に立てるその母の心を透して、これを追想することを禁ずる能はず。

主が前後三年間の傳敎は、玆に幾多の敵人をして彼の身邊に迫り、遂に彼を死に致さずんば止まざるに至らしむ。冷嘲執罵、獅子の吼ふるが如き其中に、主は優しき眼に、忍びがたき愛と涙とを湛へて、おのれを望める母の姿を認めぬ。おのが身は、今や世界の罪を負うて、悲痛慘憺、萬感こも〴〵胸を衝いて來る大刹那の間に樹てり。この時、彼は渇ける唇を開き、微かにその母を呼んで曰く、

『女よ、これ汝の子也』

而して尙ほその傍に立てるおのが畢生の友、ヨハネを顧みて、これに告げて曰く、

『わが母を見よ』

友情濃かなるヨハネは、直ちにその意を諒したり。主は心安けく、旣に永遠の休息に入れり。力なき母は、ヨハネの賴母しき腕にもたれて、その家に赴けり。

げに死は、人をして靜肅誠實の境に樹たしむ。松陰一たび江戸の獄中に在りて、いよ〳〵死刑の詮議一決したるを洩れ聞くや、彼は父母に與ふる手翰の奧に、

親おもふ心にまさる親心
　けふの音づれ何ときくらん。

あゝ、この死の際に、第一彼の念頭に上りしものは、實におのが父母にてありき。自ら父母を懐ふのみならず、父母のおのれを懐ふこと、更におのれが父母を懐ふよりも、幾層その情の殷なることを察し、今日の音づれ何と聞くらんとはいへりしなるべし。それ世に人の子として、おのが受けにし撫育の恩、誰かこれを忘るゝことを得んや。基督の如き、その感恩の情、餘人に比して、更に大に最も深厚なるものありしや疑なし。而してその母に於ても、また基督を懐ふの念、世の多くの母たるもの〻、到底經驗し得ざる處のものありしや明か也。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

母は既に、ヨハ子の家に伴はれて、つく〴〵わが子の最後を思ふにつけ、その生前のことゞも、まざ〳〵と心頭に上りて、眠らんと欲して眠られず。その追想の歩は、恐らくは先づ主が三年間の事業に向つて進みしならん。主は寢るに處なく、東奔西馳、幾多の罪人と交つて、偏に彼等を救はんことを勉む。而してその末路のしかく悲慘なるものありしは何ぞや。更に泝つて、その十八年の間、あしたには父の業を助け、ゆふべにはわが膝に寄りて、祖先の物語に餘念なく耳を傾け、相共に神に祈り、相共に神に謝し、またなき平和と溫情とに抱かれて、樂しく暮しゝ家庭の基督を懷ひては、一しほ哀情の切なるものありしならん。更に進んで、一念主の誕生の際に及びては、その堪へがたき悲傷の裡に、尙ほ一道の光明を認めたるや疑なし。

見よ、客多き旅館の片邊に、身をきる如き冬の夜風にさらされて、彼女は人の子の母となりぬ。當初神の召をうけし時、いかに淺からぬ恩寵とはいひつゝも、思へば身にあまるこの光榮に、恐怖の念、喜悦の情、こもごもそのやさしき胸に往來したり、而して一たびおのが姉妹の口より、

『女のうちにて、汝は福也』

との語を聞きては、何物かおのが心の琴線に觸るゝものありしが如く、遂に彼女をして、

『げによろづ世までも、われを福なるものと唱ふべし』

と歌はしむるに至りぬ。かくて基督は、この世に呱々聲を擧げたり。夜は既に去りて、東天將に明けんとす。恰も一群の牧夫ベツレヘムの郊外より來り、果して嬰兒の槽に臥せるを見て、恐らくは、その母に告ぐるに、野に於ける彼等の見聞を以てせしならん。歲月流るゝが如く、今や三十三年の後、わが子の悲慘の死に臨みて、かの無調法なる牧夫の物語を思出でゝは、今昔の感、膓九回するものありしや必せり。見よ、星明かなるかなたの空に、數知れぬ天の使の現れて、くすしき樂のしらべに、白羽の衣飜へし、淸しき聲もて唱ふる歌はいかにぞや。

『いとたかき處には、榮光神にあれ、
地には平和、
人には恩寵あれ』

僅々數語の裡、げに神の大精神のこもれるを見る。想ふにマリアは夜の更くるも知らで、この歌をくり返し、繰返しては、今日わが子の死に遇ひしかなしみより出で丶、更に得もいはぬ希望の幻境に導かれしならん。蓋しこの神のみ旨は、偏に基督によりて全うせらるべければ也。

基督世に出で丶より、茲に殆んど二千年、その間決して長からずといふべからず。而かもこの世界が、黄金時代に達するは、尚ほ甚だ遼遠なるものあるを恐る。見よ、國は國と爭ひ、人は人と爭ひ、肉は靈と爭うていにしへより今に至る迄、寸時も休止する處なきにあらずや。我等基督の徒たるもの、この間に處して如何か覺悟すべき。我等は基督の母と共に、今自ら深く顧みて、一片耿々の希望、おのが胸底に躍るものあるを覺ゆ。愛は最後の勝利者也。神の大精神は、たしかに基督によりて完うせらる。我等が活動するの期、それ唯今の時に在り、努めざるべけんや。

雜録

●基督教傳道義會

讀者の中に基督教傳道義會の名を御聞きになつた方々は幾人御座いませうか。東京本所區林町三丁目二十番地に基督教傳道義會本部と書いた瓦斯燈を出して居る小さな住居がある。其主人は外村義郎君とて、早くから貧民傳道と云ふ困難な事業に志して、十年一日の如く、犧牲的生涯を送つて居られる御方でありますが、事業の爲に、同君の經驗された艱難辛苦の物語を聞きますと、實に小說にでも讀む事の出來ない程な事件が澤山ある。私共信者が傳道と云ふ事に大變冷淡であり、無頓着である爲に、斯かる熱心誠實な兄弟に、一しほの心痛を與へて居る事を知つて、恐ろしい思が致します、これらの事は暇がある折に又御談しませう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

扨て基督敎傳道義會といふのは何ですかと尋ねると、外村兄の御返事はかうでした。

『十六年以前、私は東京に居つて、方々の敎會に說敎を聽きに行きましたが、何處の說敎も六ケ敷くて、又會堂へは這入りづらく、一二度這入つて見ると、別に何でもないが、最初は仲々這入りづらい、自分も最初は敎會に這入つて、說敎を聽く事を遠慮して、敎會堂の周圍を三度廻り、「御這入りなさい」と云はれて初めて這入つた。こんな境遇の人々が、自分の外にも澤山にあるでせうから、左樣な人々に、可成了解される樣に御談をして、少し分つて來てから、他の敎會に送つて上げたいと思つた。又東京には富貴な人も多いが、貧乏人も多い、後者は忙はしくて、敎會に行くのが六ケ敷いと云ふから、こんな境遇の者にも福音を述べたいとの念から、此義會なるものを起しました。

東京を先づ一軒の家として御覽なさい、新橋は表門である。此表から這入る人は何を第一に見るでせう。即ち新橋の直ぐ側なる新綱町の貧民窟である。裏門は上野である、此處より入る者は、其傍なる萬年町の貧民窟を見る。甲武鐵道より見ると鮫ケ川の貧民窟である。誰でも、自分の家の表門の處へ掃溜を置くものがありませうか。貧民窟は掃溜の樣なもので、それを入口に置くのは、實に市中の恥辱である。大勢の出入をする場處を御覽なさい、幾十人の不幸な者が、物を乞うて居る。橫濱の某人がいふのに、「一ツ爰に否な事がある、今日は好天氣だからといつて、散步して心地よいと思つて居ると、癩病人に逢ふ、本當にゾッとして仕舞ふ」と。人々は斯く癩病人を輕蔑し、疎んずるが、彼等を憐み、感ずる者が幾人あらうか、自分の家族中に不具者、癩病人があると、それを門口に晒して、通行人に見せ散らす樣な事はしない。可成疵護して、家の恥辱とならぬ樣に匿すのが人情である。

何卒困難な人、疾病ある人に助をしたいと云ふのも、此會の目的である。併し此會は傳道會社の補助を受けては居ない、敎會の力も借りて居ない。只同情者から成立して居るので、今日は四個所に集會所を持つて居る。第一、東京本所林町三丁目廿番地が本部で、第二

深川猿江裏町十四番地、第三、四谷東信濃町十番地、第四、名古屋市西新町二丁目廿九番地である。又義會は敎會に列する事の出來ぬ者のために、言文一致の新天地と云ふ小冊子を發行して居る。施療薬も特志會員の贊助によつて少々實行して居る。併し金が無くては維持が出來ないから、義會は洗粉、石鹼、歯磨、宗敎の書物等の取付をして、僅のものを得、其他は朝夕の祈に依つて支へて居る。こんな次第ですから、神様は同情者を與へて、或時は五錢、或時は十錢、又或時は五十錢來る事もあるが、定まつては來ない。何卒成べく多くの人々の祈と助を願ひます。」

●外遊中なりし本田庸一氏この頃無事歸朝せられたるは、我等が慶賀に堪へざる所也。同氏が英國滯在中、萬國基督敎女子青年會幹事スペンサー孃及び萬國基督敎學生同盟女子大學部幹事ラウス孃に會し、互に日本に於ける青年會の事業に就いて相語れりといふ。我等は同氏が外國女子青年の間に於ける事業に就いて、本紙上に述べらるゝの時近からんことを望む。

●去月九日東京津田梅子女史の宅に小集を催して、同地に於ける基督敎女子青年會設立に就いて計る。會するもの津田、本田、小幡、河井、ホイットマン、ヒバード、ソーバー、マクドナルドの八氏にして、憲法を編制し、且つ上記の諸氏に更にバック、矢島、平田、岡田、井上、グリーン、佐藤及びエストの八氏加はりて、同會の諸務を處理することに決し、同月廿五日大隈伯邸に於て發會式を擧ぐべしと。

●去月十八日。フエリス女學校に於て、横濱各女學校の聯合祈禱會を催したり。集るもの凡四百名。日本女子青年の上に神の祝福を祈れるもの、二十餘人の多きに及び、大にその應驗の著しきものあるべきを感ぜしめたりと。東京の河井道子女史これに臨み、祈禱に就いて語る所ありしが、頗る聽衆に感觸を與へたる由。

●去月の祈禱週日中、青山女學院學生は毎日正午に祈禱會を催したるを以て、寄宿生は勿論、通學生もこれに出席し、能く心を同うして主の王國のために祈ることを得たりといふ。

●其他祈禱週日に催したる特別なる會合に就いて、金澤、函館の諸女學校より報告を得たり。

●また東京に於ける會合は、九段敎會に催せられ、出席者百五十名位、諸名士の有益なる勸話に加ふるに、女子青年の熱心なる祈禱を以てし、極めてうるはしき會合なりしと。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

the kindness of Count Okuma to take the form of a garden party at Count Okuma's on Saturday, Novembear 25th, or in case of rain the next Saturday. It is hoped that this will be the beginning of real association work among the Young women of Tokyo.

* * * *

Under the auspices of the Yokohama association, a joint prayer meeting of the Girls' Schools of yokohama was held in the Ferris Seminary on Thursday, Nov. 18th, during the week of prayer. There were about four hundred young women present and during the half hour spent in prayer over twenty prayers were offered for God's blessing on the Young womanhood of Japan. It is felt that a great blessing in the lives of the young women themselves as well as upon those for whom they prayed will follow. Miss Michi Kawai of Tokyo gave a simple message on prayer to the girls, which touched the hearts of all present.

* * * *

The girls of the Aoyama Gakuin, Tokyo, observed the week of prayer, by holding daily prayer meetings at the noon hour each day during the week. By this arrangement the day pupils as well as the boarders were able to join the prayer circles, and so unite more definitely in praying for the coming of Christ's Kingdom throughout the world.

* * * *

Word has come from a few cities of special meetings held during the week of prayer. The Presb[illegible]rian school in Kanazawa used [illegible]ir regular meeting to unite in the world-wide intercession, and the three girls' schools of Hakodate held a joint meeting in the school of the Methodist Episcopal Mission.

* * * *

During the week of prayer a meeting for Young women under the auspices of the National Committee was held in Tokyo in the Kudan Methodist Episcopal Church at which about one hundred and fifty young women were present. Miss Whitman, chairman of the National Committee presided, and Miss Michi Kawai spoke on the value of united prayer, Dr Motoda on some hindrances in recognizing the power of prayer in the lives of young people, and Mr. Honda whom we were specially glad to welcome back from his trip around the world, spoke for a few moments about his trip, and then emphasized that in the midst of the growing external freedom of the present day among young women, it was well to remember that the only true freedom was inward and not external: and that true freedom was only attained through being well ruled. During the season of prayer which followed Dr Motoda's talk many young women engaged in earnest prayer and the spirit of the meeting seemed to one of quiet waiting upon God.

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

THE LIGHT OF CHRISTMAS.

Through the sky, one blessed night, many years ago,
Came a host of angels bright, and their song we know;
" Peace on earth good-will to men,"
We repeat the news again,
As the angels sang it then,
Though so long ago.

There was joy in Bethlehem town, in that long ago,
When a little child came down to a manger low;
Like a gentle snow-white dove
Came the Christ-child from above,
Message of a Father's love,
Sent so long ago.

Far above, one holy night, in the long ago,
Shone a star of beauty bright, o'er the earth below,
Guiding wise men to the " Light,"
And the star-beams, clear and bright,
Bring to us each Christmas night,
Thoughts of long ago.

In our hearts, this Christmas time, still the star-beams glow;
Still we hear the joy-bells chime, tender, sweet, and low.
For, with blessing on our way,
Shines the Light of Christmas day,
Who in Bethlehem's manger lay,
In the long ago.

—Elizabeth G.H. Atwood.

ASSOCIATION NOTES.

The Young Women's Christian Associations of Japan wish to extend a hearty welcome to President Y. Honda upon his return home from his trip abroad. While in England Mr. Honda met the secretary of the World's Young Women's Christian Association, Miss Clarissa Spencer, and Miss Ruth Rouse who is secretary for Women's Colleges of the World's Student Christian Federation, who talked with him about the work in Japan. We shall hope that before long Mr. Honda will speak to us through the columns of our magazine about the work among young women in other lands.

* * * *

On Thursday November 9th a meeting was held at Miss Ume Tsuda's home in Tokyo, to organize a local Young Women's Christian Association. There were present Miss Tsuda, Mrs. Honda, Mrs. Obata Miss Kawai, Miss Whitman, Mrs. Hibbard, Miss Soper and Miss Macdonald. A constitution was adopted and a board of management elected consisting of the above ladies and the following:—Mrs. Buck, Mrs. Yajima, Mrs. Motoda, Mrs. Hirata, Miss Okada, Dr Inouye, Mrs. D. C. Greene, Miss Kin Sato, and Miss West. The ladies decided that a general meeting should be held to present the work of the Association. It has since been arranged through

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

quered, obscure, of little value in the eyes of the Caesars, held firmly the thought of God. The sages from the East, by the desert path star-guided came to Palestine.

In the solemn midnight, centuries ago, the temple flocks were pastured on the hills. Faintly came through the brooding darkness the cry of a lambing ewe. The shepherds were awake and vigilant; there was the mystery of motherhood there too, among the bleating sheep. The night was cold, the shepherd gathered their shaggy cloaks closer around them, and wished for the day.

They knew no more than the wise men from the East, that Mary with her infant child was lying in the straw of the stable, with the cattle looking on, for in the inn there had been no room for the travellers and the mother whose hour had come upon her. The Book tells us how she wrapped Him in swaddling clothes, and laid Him in a manger, because there was no room for them in the inn.

"And there were in the same country shepherds, abiding in the field, keeping watch over their flocks by night. And, lo! the angel of the Lord came upon them and the glory of the Lord shone round about them and they were sore afraid. And the angel said unto them, Fear not, for behold, I bring you good tidings of great joy which shall be to all people. Eor unto you this day is born in the city of David, a Saviour which is Christ the Lord.

"And suddenly, there was with the angels a multitude of the heavenly host, praising God and saying, Glory to God in the highest, on earth peace, good-will towards men. And it came to pass as the angels were gone away from them into heaven, the shepherds said one to another, Let us now go even unto Bethlehem, and see this thing which is come to pass, which the Lord hath made known unto us."

Thus with a chorus of such melody as earth had never known, and never will know until the Lord shall come again, the Christmas angels sang over Bethlehem.

Only the simple-hearted heard them, and the poor. He came to save His people from their sins, and it was the common people who should first hear Him gladly when He spoke as never man had spoken before.

Do you notice that the angels without exception sound the call to a dauntless courage and an invincible faith? Fear not, they cry. Fear hath torment. Perfect love casteth out fear. Fear not, little flock, it is your Father's good pleasure to give you the kingdom, over everything that opposes, most of all, over fear.

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

w eeter than the rose of Sharon. A stranger with a message meant for her only! Wonderful were the words he spoke, each falling on her ear with a distinctness that fastened it in memory forever.

"Hail, thou that art highly favored, the Lord is with thee. Blessed art thou among women. Fear not for thou hast found favor with God. And behold, thou shalt conceive in thy womb, and bring forth a son, and shalt call his name Jesus. He shall be great and shall be called the Son of the Highest; and the Lord God shall give unto Him the throne of His father David, and He shall reign over the House of Jacob forever, and of His kingdom there shall be no end."

And Mary said, "Behold the handmaid of the Lord; be it unto me according to Thy Word."

Then she rose, and in haste and tumult of feeling, not comprehending, but wholly accepting the will of the Lord, went to pay a visit in the quiet household of Zachariah and Elizabeth. Elizabeth came to meet her young guest, a stately figure, with white tresses, but a light as of triumphant youth in her eyes. "And Mary abode with her about three months, and returned to her own house."

In sequestered peace, away from the babble of the town, away from the questioning of those who came and went, Mary spent the months when first she realized that she was with child. Many a day that vision of the angel was with her in memory, filling her with gladness. The whiteness of the lily was in her every thought.

Weary hours were before her, a toilsome journey, a lowly place wherein to face the hour of supremest pain. Poor young mother on whose life already lay the shadow of the cross, though God's crown of dignity was on her brow, a crown of thorns!

Three kings, tradition tells us, journeying with a retinue, traversed the desert paths, guided by a star, of such golden lustre as earth had never seen before. They were learned men, astrologers, and by the signs they read in the sky, they were anticipating the coming of a mighty ruler. Their caravan fared onward, the star leading the way. One night, as they travelled, they knew that their errand was accomplished. The star stood still over a stable in Bethlehem, a little mountain town in the land of Judea.

From the mystic, dreaming East, came those who were ready to hear the song of the angels. The world, so long tossed with wars, to and fro, like a tempestuous sea, was at peace. Rome was unquestioned mistress of all the inhabited globe. Greece, with her stores of learning, her art, her love of beauty, was ensphered in calm. Palestine, con-

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

custom. And so is the phrase' Thy rod and thy staff,' for the shepherds carry a weapon for defense and one for guidance. Ah, madam, you should see the sheep cuddle near the shepherd to understand that word, 'They comfort me.' The shepherd's call, 'Ta-a-a-a, Ho-o-o,' and the answering patter of feet as the sheep hurry to him, are fit sounds to be chosen out of the noisy world to show what comfort God gives to souls that heed his voice, and those sounds have been heard in my country this day as they were the day this shepherd psalm was written."

(*To be continued.*)

IN THE FULNESS OF TIME.

By Margaret E. Sangster.

"Joy to the world, the Lord has come,
Let earth receive her King."

In what cloistral quiet did that fair virgin of Judah spend her childish years, we do not know, for on this subject the Book is silent. Yet she must have been the fair daughter of a devout home, trained in reverent ways and alert in ministries of love. Little did she dream, as she went about her home tasks, or sat at her mother's feet, that upon her head was to be poured the honor, on her heart the burden laid, of bringing forth the Christ. Ages ago, in rapt vision, Isaiah had exclaimed, "Behold, a virgin shall conceive and shall bear a son, and shall call His Name, Immanuel." Ages still earlier, a patriarch on his deathbed, had foretold that the sceptre should not depart from Judah until Shiloh came. The Book is radiant with divine intimations. Always there are stars rising in the silver sheen above the horizon, pre-figuring the Star of Bethlehem.

One day, as Mary sat in her mother's little house, tranquil, contented, a strange trouble invaded her soul. "Her eyes were homes of silent prayer." She was made presently to feel that she was not alone. Her mother was away talking with some kindly neighbor. Her father and her brothers were somewhere at their daily toil, Joseph, her grave betrother, was busy in his shop; she knew how steadily he worked, how fragrant were the woods which he wrought into tools and plows and furniture; not much more than a child herself, she had liked to watch the yellow shavings curl from under the plane and fall glittering to the floor of the carpenter's little room.

Mary!

A gentle voice, clear and low, yet full of authority, spoke her name.

In the doorway stood a stranger, robed in white linen, in his hand a lily, purer than the snow of Carmel,

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

had the rhythm of music and the hush of veneration in it, he quoted: "'The Lord is my shepherd, I shall not want.' There is the opening strain of its music; in that chord is sounded the keynote which is never lost till the plaintive melody dies away at the song's end. All that follows is that thought put in varying light." I wish it were possible to reproduce here the light in his face and the interchange of tones in his mellow voice as he went on.

"'He maketh me to lie down in green pastures'; nourishment, rest. 'He leadeth me beside the still waters'; refreshment. You think here of quietly flowing streams and get only another picture of rest. But streams are few in that shepherd country, and the shepherds do not rely on them. To the shepherd 'the still waters' are wells and cisterns, and he leads his sheep to these still waters not for rest but to bring up water to quench their thirst." Then he talked of how the varied needs of the sheep and the many-sided care of the shepherd are pictured with consummate skill in the short sentences of the psalm. "Each is distinct and adds something too precious to be merged and lost," he said.

"'He restoreth my soul'; you know," he said, turning to me, "that 'soul' means the life or one's self in the Hebrew writings." Then addressing all he went on: "There are private fields and gardens and vineyards in the shepherd country and if the sheep stray into them and be caught there it is forfeited to the owner of the land. So, 'He restoreth my soul,' means the shepherd brings me back and rescues my life from forbidden and fatal places."

"'Restores me when wandering is the way it is put in one of our hymns," I interposed.

"Ah, sir, that is it exactly," he answered, "Restores me when wandering."

"'He leadeth me in the paths of righteousness for his name's sake;' often have I roamed through the shepherd country in my youth and watched how hard it is to choose the right path for the sheep: one leads to a precipice, another to a place where the sheep cannot find the way back; and the shepherd was always going ahead, 'leading' them in the right paths, proud of the good name as a shepherd.

"Some paths that are right paths still lead through places that have deadly perils; 'Yea, though I walk through the valley of the shadow of death,' is the way the psalm touches this fact in shepherd life. This way of naming the valley is very true to our country. I remember one near my home called 'the valley of robbers' and another 'the ravine of the ravin.' You see 'the valley of the shadow of death' a name is drawn from my country's old

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

THE SONG OF OUR SYRIAN GUEST.

By William Allen Knight.

He was a man of winsome mind, this Syrian guest of ours, and the spirituality of his culture was as marked as the refinement of his manners. We shall long remember him for the tales told that evening of his home on the slope of the Syrian mountains, but longest of all for what he said out of the memories of his youth about a shepherd song.

"It was out of the shepherd life of my country," he remarked, "that there came long ago that sweetest religious song ever written—the Twenty-third Psalm."

After the ripple of his merriment with the children had passed he turned to me with a face now serious and pensive, and said: "Ah, so many things familiar to us are strange to you of America." "Yes," I answered, "and no doubt because of this we often make mistakes which are very serious." He smiled pleasantly, then with earnestness said: "So many things in the life of my people, the same now as in the days of old, have been woven into the words of the Bible and into the conceptions of religious ideas as expressed there; you of the Western world, not knowing these things as they are, often misunderstand what is written or at least fail to get a correct impression from it."

"Tell us about some of these," I ventured, with a parental glance at two listening little faces.

After mentioning several instances, he went on: "And there is the shepherd psalm; I find that it is taken among you as having two parts, the first under the figure of shepherd life, the second turning to the figure of a banquet with the host and the guest."

"O,we have talked about that," said my lady of the teacups, "and we have even said that we wished the wonderful little psalm could have been finished in the one figure of shepherd life."

"It seems to us," I added, wishing to give suitable support to my lady's rather brave declaration of our sense of a literary flaw in the matchless psalm, "it seems to us to lose the sweet, simple melody and to close with strange, heavy chords when it changes to a scene of banquet hosptality. Do you mean that it actually keeps the shepherd figure to the end?"

"Certainly, good friends."

With keen personal interest I asked him to tell us how we might see it as a shepherd psalm throughout. So we listened and he talked over the cooling teacups.

"It is all, all a simple shepherd psalm," he began. "See how it runs through the round of shepherd life from first word to last."

With softly modulated voice that

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

heirs of God and joint heirs with himself.

It is for us who can testify personally to His saving power, to herald as the ange's did at His birth, the same message of salvation. He is the Saviour of every one who comes to Him, and without Him there is no remission of sins. May the spirit of this Coming Christmas be the same as on that first Christmas day when heaven and earth rejoiced together at the coming of the King of Kings and Lord of Lords: and may each Christian young woman become a herald of salvation to those who do not know that the Saviour of the world has come.

キリストと共に後嗣となることを得たる也。

我等は各自ら主の救の力を證し得るを以て、主の降誕の際、かの天の使のなしゝが如く、我等もまた等しくこの福音を世に傳ふべき也。基督はすべて彼を求めて來る者の救主にして、彼を措いては、罪の赦免を得べき道一として在ることなし。願くはこの來るべき降誕祭をして、そのかみこの日に於て、天も地も、王の王、主の主たる基督をよろこび迎へたるが如くならしめよ。而してまた各基督教女子青年が、救主の降世を知らざる人々に、斯道を傳ふる使者たるに至らんことを。

THE SHEPHERD PSALM.

Psalm. 23.

The Lord is my shepherd; I shall not want.
He maketh me to lie down in green pastures;
He leadeth me beside still waters.
He restoreth my soul:
He leadeth me in the paths of righteousness for his name's sake.
Yea, though I walk through the valley of the shadow of death,
I will fear no evil; for thou art with me;
Thy rod and thy staff, they comfort me.
Thou preparest a table before me in the presence of mine enemies:
Thou hast anointed my head with oil;
My cup runneth over.
Surely goodness and loving-kindness shall follow me all the days of my life;
And I shall dwell in the house of the Lord for ever.

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

as a babe in a manger; and yet he vas to show Himself stronger than leath or hell in the last great con-lict. Not with worldly power did ne come, and yet the kings of the East did homage to the helpless babe: and strong men left their homes and work at the word 'Follow me" from the gentle man of Nazareth.

But His power was greater than hat of the world the powers of vhich He was able to overcome vhen he said "All power is given unto me in heaven and in earth." And this is the reason we rejoice at every Christmas time, because all power has been given to him who came as a humble babe, to save us from sin, and from every thing less han what God expected us to be in Him.

We as individuals, and the world need the message of salvation. It is he desire of every human heart that s true to the voice of God within im. "Who shall deliver me?" ried the great apostle Paul and hen in triumph He replied, "I thank God through Jesus Christ our Lord."

God created His children to have power and strength and dominion, nd sin robbed us of our heritage, ntil he who always pleased the Heavenly Father came and led us ack to God. And we are in him

個の嬰兒に過ぎざりき。されど彼は最後の大苦鬪に於て、死と陰府もおのれに勝つことと能はざるを示すべき運命を有したり。彼はこの世の權勢を持して來りしにあらず、されど東方の王等は、この寄邊なき嬰兒を拜したり。而してかの力猛きものどもも、やさしきナザレの人より『我に從へ』とのことばを聞きては、おのが家郷を辭して、傳敎のために働きぬ。

されど彼の權威は、この世のそれよりも偉大にして、彼が『天のうち、地の上の凡ての權を我に賜れり』といひけん如く、彼はこの世の權勢を服することを得たり。主の降誕の日に接する毎に、我等が歡喜措く能はざる所以のものは、即ちかく卑しげなる嬰兒として生れ、罪と其他すべて、神の聖旨にかなはぬことより我等を救はんとて、この世に來りし基督に向つて、かくすべての權威の賦與せられたるに在り。

我等は個人として、また社會として救の福音を要する也。此救は、おのが衷懷に響く神のみ聲にまめやかなる人々の、何れも等しく希ふ所也。大使徒パウロは叫んで曰く、『我を救はんものは誰ぞや』と。而して彼はほこりかに答へて曰く、『我等の主、イエス、キリストによりて神に感謝す』と。

神は權と力と國を與へんとて、おのれの民を造り給ひしに、罪はこれらの遺業を我等より奪ひ去りぬ。されど常に天父のみ心にかなへる基督は、遂に世に降りて、再び我等を神のみ下に導きたり、而

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

o. 8
Monthly
mmittee
n Japan
Address
Christian
ilton.
helps.
uh.
aki.
no.
oper.
he
in Japan.

Young Women of Japan

Vol. II December, 1905

A SAVIOUR WHO IS CHRIST THE LORD.

It is not to be wondered at that the keynote of Luke's gospel is one of great joy when he heralds the glad message of the advent of a Saviour. Let history tell the awful tales of the moral and spiritual degradation of the world to whom Luke speaks the glad tidings: "I bring you good tidings of great joy, for unto you is born this day, a Saviour, who is Christ the Lord."

This is the message which every human soul needs, and as the Christmas time comes round we are reminded once moreof the Son of God who came to this world to show us the sort of men and women God expected those whom he had made in His image to be, and to point the way of Life through Himself. He came to do for men what they could not do for themselves, namely save themselves from sin and its consequences and in doing this, "He saved others, Himself He could not save."

And yet how humbly He came! Not with the outward trappings of a king, although heralded by a

主基督なる救

路加が救主の降臨に
を傳ふる時に、彼はその
目を、この大なる喜悦の
したることは、敢て怪し
ず。路加がその福音を傳
れ大なる喜悦の音を爾曹
し。それ今日爾曹のため
れ給へり。これ主たるキ
と宣べたる當時の社會
靈性上に於ける頽廢の
べきものありしかは、
て、よくその情態を辨
得べし。

それこの救の福音は、
人が、等しくその心に
今や主の降誕の日に接し
は神がおのれの姿にな
りたる人間に、かくわ
み給へる鑑を示し、躬
の道を明にせんがため
に來りし神の子を、玆
せずんばあらず。彼は
れのために爲し能はざ
一即ち罪とその結果と
救ふこと能はざる處の
んが爲めに來れる也。
『人を救ひて、己が身を
はざりき。』

されど彼の世に來
ていやしき樣にてあり
歌は、空高く聞ゆれど、

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Young Women of Japan

Vol. II December 1905 No. 8

The "Young Women of Japan" is a Bible Study Monthly for young women published by the Promoting Committee of the Young Women's Christian Association in Japan. Price 50 sen a year. Four *sen*, five *rin* a copy. Address 15 Dote Sambancho Kojimachi, Tokyo.

Promoting Committee of the Young Women's Christian Association in Japan.

Miss M. A. Whitman, Chairman.
Miss Amy G. Lewis, Secretary.
Miss Ume Tsuda.
Miss A. B. West.
Mrs. G. K. Hanai.
Miss H. J. Worthington.
Mrs. V. W. Helm.
Mrs. G. M. Fisher.
Miss L. Hamilton.
Mrs. G. S. Phelps.
Miss L. Zurfluh.
Mrs. H. Kozaki.
Miss H. Hirano.
Miss S. Ellis.
Miss E. M. Soper.
Miss Kawai.
Miss Kin Sato.

Miss A. Caroline Macdonald }
Miss Theresa E. Morrison } Secretaries of the World's Young Women's Christian Association in Japan.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

治三十七年五月七日第三種郵便物認可

Fear not; for behold I bring you good tidings of great joy which shall be to all people: for unto you is born this day a Saviour which is Christ the Lord. Luke 2: 10. 11.

Vol. II December 1905 **No. 8**

YOUNG WOMEN OF JAPAN

CONTENTS.

English.

Editorial.
The Shepherd Psalm.
The Song of our Syrian Guest (to be continued.) *W. A. Knight.*
In the Fulness of Time. *Margaret E. Sangster.*
The Light of Christmas. *E. G. H. Atwood.*
Association Notes.

Japanese.

Bible Study. *A. C. Macdonald.*
Education from a Christian Standpoint. *Sangetsushi.*
What is Religion? *G. Tomura.*
College Life in America, II. *M. Kawai.*
Thoughts on Christmas. *T. Okuno.*

15 Dote Sambancho, Kojimachi, Tokyo.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA